
魔法少女がご主人様じゃ嫌ですか？

迷音ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女がご主人様じゃ嫌ですか？

【Nコード】

N0768T

【作者名】

迷音ユウ

【あらすじ】

どうもこんにちわ。主人公の朝山祐樹です。
はい

待ったくさいなんなことに、いまおかしいことになってます。
だれか、正直助けてくださいよ。

何で僕が、

「魔法少女」

の下僕なんかに……………

プロローグ（前書き）

わるのりしてかいてます。続くかどうかはわかりません。
勢いって怖いね

プロローグ

えー・・・、かいつまんでお話をさせていただきますと、今、僕はとても奇怪な状況です。なんだろうね、これ。

えーっと、僕は確か、学校が終わって、歩いて帰宅していたはず。それで、確か近所の駄菓子屋の角を曲がった辺りに、一人の僕と同じぐらいの歳の女の子がいて、まあ、その子とぶつかってしまったわけです。そのまま倒れこんで、僕の手はその女の子の胸をさわってしまったとかいう・・・。まあ事故なんだけど。あきらかに。

そしたら、その子がいきなり、「はい、あなた死刑決定」とか言って、満面の殺意のこもった笑みで追いかけてくるから、まあそりゃあ驚いた。いや、これだけならまだ理解の範疇なんだけど・・・。何せその女の子は変な呪文らしきものを唱えたかと思うと、少女の横の空間に魔法陣が現れ、それが光りだし、いつのまにか少女の横には、三つ首の黒い犬みたいな生物がいたり、はたまた、そいつが追いかけてくるので、さらにスピードを出して逃げていますと、再び女の子は呪文を唱え、今度は後ろから雷が飛んでくる始末。これはなんなんだ！？

ちよつと整理しよう。

僕は学校から家に向かって帰りだしました。駄菓子屋の角で女の子とぶつかって、少しえらいことに。それで、女の子はなぜか魔法らしきものを使い、僕を追いかけてきている。

これは・・・・・・、夢？

僕は依然走っている。まあ、一応長距離には自信がある。でも、長距離を走るときは、ずっと全力疾走しているわけではないので、今全力で逃げているのなら話は別だ。すぐ後ろには、女の子が呼び出した謎の犬が俺に噛み付こうとして、何度も空ぶっている。おー・・・こわ。

「待ちなさい！この変態男！」

女の子は後ろから叫んでくるが、僕は無視する。取り合ってる暇等ない。今止まれば、確実にこの犬の餌食にされる。

「なんなんだーーーー！もうまじで！！」

バゴーーーーッッン！！

「！？」

後ろから雷が飛んできた。幸い僕にはあたらなかったが、電柱にあたった。電柱は木っ端微塵に吹き飛ぶ。

「~~~~~！！」

もう言葉にもならない。「冗談じゃない。僕が悪いとはいえ、こいつは本当に殺す気だ。」

「ゴメンって！！僕が悪かったから！！」

僕はもう何度目か知らない叫びを、空に向かって吐き出した。無駄な体力消費とは思いつつ。

「別に謝ってもらっても嬉しくないもんね！謝りついでに死んで！もう、言ってることが無茶苦茶だ。やってることもだけど。」

僕は前を向いた。丁字路。・・・・・・。僕はなにかをひらめいた。お、これならこの犬を撒けそうだ。

ガウッガウッ！

後ろから犬（？）の鳴き声が響いてくる。

僕は丁字路の突き当たり、ぎりぎりまで行き、・・・・・・カクっ、と直角に曲がった。我ながら、きつちりと。

ドシーン！ ギャウン！

犬（？）はそのまま壁に突進してしまい、その場に倒れ、気絶した。

「ちっ、私の可愛いケルベロス（ペット）を・・・・・・」

後ろから舌打ちが聞こえた。ていうか、あれのどこが可愛いんだ。

そんなことどうでもいいのだが……。

「私の、私のケルベロスを……、よくも！」

「え……!!?」

無駄に恨みを買った。

「やばい……、このままじゃ追いつかれる……。」

まじめに、危機感を感じた。このままじゃ『殺される』。

耳を劈くような音がした。僕の膝はなぜかガクリと折れ、僕は地面に跪く。急に腹が痛んだ。腹を押える。ベチャっという音とともに、手に生暖かい液体がつく。

「え…….?」

血。血だった。僕は恐る恐る、自分の腹を見る。

「な、なんだ……これ……。」

穴があいていた。ぽっかり、と。完全に貫通。

カッン、と後ろで足音がする。

僕は振り向く。

さっきの女の子がいた。

「さあて、思い知ったかしら？ケルベロスの仇は取らせてもらったよ」

最初の目的を忘れていたのだろうか。いつのまにか、僕を追いかけている目的が変わっていたらしい。……と、急に視界が歪んだ。意識が朦朧としてくる。

「イ……ヤ……ダ。こんなことで死にたくない……。」

女の子とぶつかったのが原因で、しかもその女の子に殺されて死ぬなど……。ありえない。しかし、僕を待ち受けているのは『死』。それ以外にない。何せ腹に大穴があいている。もうだめだろう。

「なっさけないわね。大丈夫殺しまではしないよ。こんなところで殺人犯になりたくないからね」

女の子は、またなにやら不思議な呪文を唱える。

すると、僕の穴の開いた腹のはさむように、二つの緑色の魔法陣が現れた。その魔法陣はくるくると回転をはじめ、僕の腹にあたった。

「　　っ！」

魔法陣が完全に僕の腹と密着すると、魔法陣はぴかっと光った。

数秒後、魔法陣は消え、僕の腹の穴はふさがっていた。塞がっていたのだが……。そこにはなぜか変な紋様みたいなものが刻まれていた。

「な、な、なにこれ!!」

僕は必死に腹の紋様をこする。しかし取れそうな気配はない。

「ああ、それ？それはね……。下僕用の契約紋」

「へ……。？」

ききちがえたかと思った。

「だってさ。あなた、ケルベロス殺しちゃったでしょ？」

あゝそういえば……。、

「って、あれで死んじゃったのかよ！あの犬！」

僕がそういうと、ギロリと睨まれた。僕は少し身を縮こませる。

「……。だーから。あなたは、ケルベロスのかわりに今日から私の下僕ね」

「はあああああああ!？」

かいつまんでお話をさせていただきましたと、僕朝山祐樹は、今日の女の子の下僕になってしまいました。

あきらかに、

事故です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0768t/>

魔法少女がご主人様じゃ嫌ですか？

2011年5月7日21時40分発行